スペインのかげり

辻 邦生

阿部出版

辻　邦生（つじ・くにお）
一九二五年、東京に生まれる。一九五二年、東京大学文学部卒業。一九五七年、パリ大学に留学、一九六一年に帰国。一九六三年、『廻廊にて』で近代文学賞を受賞。一九六六年、長篇『夏の砦』を発表以後、『安土往還記』（芸術選奨新人賞）、『嵯峨野明月記』『背教者ユリアヌス』（毎日芸術賞）などで、独特な歴史小説をつくりだす。このほか、『春の戴冠』『樹の声　海の声』『北の岬』など数多くの小説作品、エッセイ集、翻訳の著書がある。

スペインのかげり

一九九〇年六月二十五日　第一刷発行
一九九〇年八月八日　第三刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者　辻　邦生

発行者　阿部秀一

発行所　阿部出版
〒一五三　東京都目黒区上目黒四―三〇―一二

印刷　阿部写真印刷株式会社
製本　東京美術紙工事業協同組合

© Kunio Tsuji 1990 Printed in Japan
ISBN 4-87242-000-4　C0093

万一落丁、乱丁のあった場合はお取替えいたします

目次

スペインのかげり　7
旅の終り　17
空の王座　33
見知らぬ町にて　73
風塵　95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ある告別　127
ランデルスにて　159
風越峠にて　177
あとがき　219

装画　渡邊　可久
装幀　中島かほる

スペインのかげり

スペインのかげり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

複雑な相貌をもつ一つの文明なり国家なりを、一瞬のうちに見ることができるかどうかは差しあたって問わないとして、私がサラマンカをたって、アビラの町をはじめて見い出したときの印象は、どこかこうした決定的な一瞬に似ていた。

それはイベリア半島を灼きつくす真夏の目くらむ太陽の下の旅であった。草一つない灰褐色の大地の起伏、手の染まりそうな青空、そして列車の後部に立つと、黒い鉄路がどこまでもまっすぐ走り、いま離れたばかりの町が、小さな塊になって、地の起伏の波のむこうに消えてゆく。列車がとまると、あたりは四、五軒の家のほか日かげさえなく、本当の村落は、はるか大地が斜めに下ってゆく野のまん中に、小さく、褐色の屋根の集まりになって見えていた。そうしたあげく、突然、アビラの町が、私の眼の前に、現われたのだった。

それは砂漠の蜃気楼のように、どこか非現実な唐突さで、谷のむこうの高みに、丸櫓や隅櫓をつらねた重々しい灰褐色の城壁にかこまれて立っていた。オリーヴの林がつづき、それがつきると、岩が野や丘を覆いはじめ、地形に変化がはじまったと思った途端だった。私は思わず息をの

み、列車が谷へ大きく弧を描いて下り、鉄橋を渡り、さらに谷をまいてのぼってゆく間、列車の動きにつれて、窓の右に現れたり、左に現れたりするアビラの町を見つめた。城壁はみるみる近づき、大きくなり、町の上につきだしたカテドラルや幾つかの教会の塔、城外に散在する修道院や家々を私は認めた。町は、城壁に完全に囲まれたまま、谷間に傾いていた。

町が突然現れるということは、さして驚くにあたらぬかもしれない。とくにこの砂漠性のカスティリア地方の町は、いかにも広漠たる大地のまん中に、まるでモロッコの守備隊の陣地のように、小さく、かたまって、立っているのである。私がアビラを一瞬に見て息をのんだのは、出現の唐突さのためでも景観の特異さのためでもない。私は、むしろその城壁をめぐらした「ポケットのハンカチ」ほどの小さな町に、ある一つの人間の営みの単位——単純で、堅固で、素朴で、それだけに必要欠くべからざる一つの単位のようなものを感じ、いい知れない感動にうたれたのだった。

そのときの私の気持ちを正確にいいあらわせないが、少なくとも私はアビラを見て、それが、ながい歴史の流れに浸されながら、さまざまな滓や澱をとどめず、古い時代の人間の営みの原型が、むきだしのまま、何一つ覆うもののない姿で、横たわっているように思われたのだ。

しかしこうした印象はアビラについて多少の知識をもつならば、まったく理由のないことであるのがわかる。なぜならアビラの町の起源はすでにローマ時代にさかのぼるし、キリスト教と回教の死闘の舞台だったカスティリアで、それはもっとも栄えた町の一つだったからだ。六世紀の

モール人の占領、それを奪取したレイモン・ド・ブルゴーニュの豪勇（十一世紀）、女帝イサベラの大帝国の統一を背景とした殷賑な市場、苛酷な大審問官トラケマーダの異端審問の不気味な舞台等、アビラの町の歴史に刻まれたひだの一つ一つに、いわば人間劇の血と膏（あぶら）がしみこんでいるはずなのだ。

歴史と文明は、かつてそれを動かしていた激昂する力が、それぞれ別種の形をかりて、現在もなお、その空間をみたし、生命をうみだしている場合にだけ（よしんばそのために過去が破壊され抹殺されようと）もっとも生なましく実在するものなのだ。

ところが、いま、このアビラの町が、その整然とした城壁のなかにとじこもり、過去を停止させたまま、生きているというこの停止感は、私に、なぜかある奇異な思い、ほとんど痛ましい感じを与えたのである。

私は駅から城門までの眩しい広い道を歩きながら、この異様な停止感について考えた。すでに幾つかの都市文明の廃墟や、眠ったような古都を見てきたはずなのに、アビラの与えた衝撃は、一種特別のものであり、私は、近づいてくる城門を見ながら、それがどこからくるのかを見つけだそうと努めてみた。

町は聖女テレサの祭りで賑わっていた。風俗写真にみるような晴れ着に着飾った若い男女が、驢馬の曳く車にのって、城門前の広場に集まってきた。日ざしは強く、広場をかこむアーケードの下で、人々は休んでいた。城門も城壁もつくられた当時の完全な形態と美しさを保っていた。

城門を入り、細い路地をのぼってゆくと、かたく角石や丸石を敷きつめた中世風の道はひっそりとして、石壁には雨のあとが乾いて色が変わり、この砂漠のような土地にも雨がふるのかと、奇妙な気持ちがした。

その路地をのぼりつめたところが、カテドラルで、後陣が城壁に組みこまれ、まるで城塞の一部か何かのように突出して見える。かつてこのカテドラルは、事実、城塞としての役割をも引きうけていたのであり、それはこの建築がゴチック式としてはスペインばかりでなく、フランスを含めても最古のものだということ、またその時代ここでは異教文化の圧力に対して絶えざる緊張と戦闘を強いられていたこと、そしてまさしくこの地点が西欧中世の辺境を形づくっていたことなどを物語っているのだった。

外の燃えるような暑熱にくらべ、カテドラルの内部の空気は、肌が痛いようにつめたかった。それは、四角く、かたい、表面の粗い石をつみあげ、つぎ目を白く漆喰でかためた、重々しい、威厳にみちた空間だった。スペイン・ゴチックの代表として挙げるプルゴスのカテドラルは、外観の壮麗さにもかかわらず、北方ゴチックの蒼古とした厳しい美しさに魅せられた眼には、どこか装飾的な感じが先に立ったが、しかしこのアビラのカテドラルのつくりだす空間の清潔な明るさは、不思議と生命にみちていて、さっき感じた町の空虚な停止感と奇妙な対照をなしていた。

カテドラルを出てあるく道々、城壁にかこまれた黄色い石壁の家並みは低く、ひっそりとして、物音一つしなかった。どんな路地の奥までも、きめ細かく石だたみが敷きつめられ、人の気配は

なく、濃いかげの中に、驢馬がじっと立っているだけだった。午睡の中にある町は、まるで城壁にとざされた過去のなかに、自らをもとざしたように見えた。ここにはトレドのように自らの栄光ある過去を、傷口のようにみせびらかして生きている観光都市の頽廃は見当たらなかったが、ただすべては虚しい静寂のなかにねむっていた。

しかし過去が過去自身を所有している場所には（カテドラルで感じたときのように）かえって生命感がみちているのは、なぜだろうか。それはたとえば城外のサン・ビチェンテ教会の場合も例外ではなかった。この教会が城外に建てられたについては次のような物語が伝えられていた。

四世紀のはじめこの異教の町で三人のキリスト教徒が拷問のうえ虐殺された。ビチェンテとその姉妹のサビーナ、クリステータの三人である。人々はその死体を城外に棄て、野獣の食いちらかすのにまかせたが、不思議にも死体が棄てられると間もなく、どこからともなく一匹の蛇があらわれて、この死体を守護するようになった。ある日、一人のユダヤ人がビチェンテ兄妹の死体をけがしにきて、この蛇に捕らえられた。この奇蹟的な出来事はユダヤ人をおどろかした。彼はただちにキリスト教に改宗することを誓って、蛇からゆるされると、三人のために寺院を建立した。その廃墟に、後になってつくられたのが、サン・ビチェンテ教会だというのだ。この縁起は、同教会の内部にいまもなお安置された殉教者三人の墓を飾るロマネスク浮き彫りに描かれていて、その様式がいかにもピレネの向こう側、モワサックやツールーズのロマネスク彫刻との親近さを感じさせ、一つの文明の空間の照応をそこに見る思いにさそう。それは同教会の正面ポルターユ

を飾る使徒たちの像にもいえるような気がした。それらはロマネスクからゴチックへの移りゆきを示していて、使徒たちは互いに話しあっているような動きがあり、ひなびて、高雅で、飄逸として、遠くシャルトルの彫像群を思いおこさせた。

たしかに私は静かな城内に足をかえしてからも、紋章をつけた黄色い壁の幾つかの邸宅や寺院や修道院を見てまわり、谷の下を流れる川におりて、端然と丸橋をつらねる見事な城壁を仰いでもみたのだった。それにもかかわらず、この町を覆っている空虚な停止感は消えず、そこには「死」のかげさえ感じられた。

それがどこからくるのか、むろん私にはわからなかった。あるいは独裁と戦乱と貧困とからかもしれない。しかし晩年のゴヤの眼にうつった人間の暗愚と狂気のグロテスクな戯画は、この大地がすでに何か悲劇的なかたちで、人間の本性をむきだしにすることを強いていた左証ではないだろうか。そしてここでは人間が自然に打ちかとうとすればするほど、逆に自然の課した激情に、復讐されているのではないだろうか。このスペインの土地では反抗の声が激しければ激しいだけ、それは虚しく燃えつきるほかなかったのだ。ドン・キホーテの笑いはゴーロワ風の豪快な哄笑とはなりえなかった。ここでは風土の眩しい明るさが神秘な暗さと熱狂とを宿している。そしてまさしくこれこそが、アビラで生まれた聖女テレサの激烈な神秘体験の本質をなすものではないのか。

城門前のサンタ・テレサ広場は眩しく照りつける午後五時の太陽のなかにあった。灼熱して、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com